



第53号  
令和7年1月  
〒963-7845  
福島県石川郡石川町  
高田271  
曹洞宗高源山長泉寺  
Tel・Fax 0247-26-2099

# 謹賀新年

皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします  
本年もよろしくお願ひ申し上げます

令和七年 元旦

長泉寺住職 西川一英 合掌

寺報をもって新年のご挨拶に代えさせていただきます



## 釈尊の教え

### 「己が身にひきくらべ」

昨年は元旦早々能登地方に大地震が発生し甚大な被害とかけがえのない沢山の生命が失われました。復旧途上の十月、これまた未曾有の大洪水により能登地方は壊滅的な被害を受けました。

被災された方々には心からお見舞い申し上げますとともに一刻でも早い平穏な日常が戻りますことを祈念いたします。

目を世界に向けますとウクライナの戦闘はやまず、イスラエルによるガザ地区への空爆は死者四万人を越え、その戦火はレバノン・イランまで拡大しつつあります。不幸の中にある人々に何



己嫌悪さえも感じる昨今ですが、新しいこの一年が皆さま方、そして全ての人々

が穏やかで幸多い一年でありますことを心から念じます。お釈迦さまが日頃弟子たちに説かれていた教えをまとめたものに『法句経(ダンマパダ)』があります。「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひきくらべ、殺してはならぬ、殺させてはならぬ(一一九偈)」

「己が身にひきくらべ」とは暴力によつて殺される側によつて殺される側になさいということですから。殺される側の恐怖や苦しみを自分自身のもので感じ受けとめるならば、殺す立場には立てません。

国家や集団が「正義」という名目で戦争やテロを正当化しますが、そこには「己が身にひきくらべ」という視点が抜け落ちています。今年は戦後八〇年にあたります。日本の戦争責任を問う東京裁判で戦勝側判事の一人だったインドのパール判事が戦争には有罪無罪はないと「日本無罪論」を展開したのはよく知られています。一九五二年サンフランシスコ講和会議で日本の独立を認めるか否かを決する折、東西両陣営の思惑が異なり会議は紛糾しました。セイロン(現在のスリランカ)代表が「憎悪は憎悪によつて消え去るものではなく、ただ慈愛によつてのみ消え去るのだ」という釈尊の言葉を引き日本への賠償請求権を放棄し日本の

独立を認める演説をしました。会場はしばらく静まりかえつていましたが徐々に拍手が多くなりそのうち大喝采になりました。結果として数カ国を除き四十九カ国が賛成し日本は国際社会に復帰できたのです。後に第二代スリランカ大統領になるジャワワルダナです。ガザの人々を思うとき、親や兄弟・子を殺され食べられないものも途方にくれる人々。イスラエルに対し憎悪のみが肥大していくその心の中にさらなる悲劇の芽が宿るのではと暗たんたる思いにかられます。

仏教は自分と他人の間に垣根を作らないようにと教えます。私たちを取り巻くすべてのものへの暖かいまなざし、「己が身に引きあてて」という仏陀の教えを通して穏やかな争いのない平和な世界を築いていきたいものです。

## 寺族宗務所研修会 長泉寺で開催



寺族とは、曹洞宗の寺院に住み住職とともに寺院を護持し檀信徒の教化に従事する方々をいいます。その寺族の研修会が県内各地から四十五人の参加の下、十月二十二日から一泊二日、長泉寺を会場に開催されました。

研修テーマは七百回大遠忌にあたる瑩山さまの生涯について、寺族のこれからのありよう、お寺のできるSDGsの取り組みなど多岐にわたりました。宿泊は母畑温泉「八幡屋」。名前を知っていても初めて泊まる方も多く設備や食事の良さに驚きの声が上がっていました。



寺族宗務所研修会開講式



ピカピカの小学一年生入学祝い安全祈願

## 再開しました ◎小学校入学祝い安全祈願 ◎日曜暁天坐禅会

コロナ禍の下、しばらくお休みしていた護持会主催「ピカピカの小学一年生入学祝い安全祈願」が四月八日新入児童二十三名の参加のもと開催されました。子どもたちは小さな手を合わせ、登下校の安全や身体健全・学業成就をご本尊さまにお願いしました。今年も小学校入学式の午後実施します。参加ご希望の方はお寺もしくはお世話人さんまでお申し出下さい。

また、日曜暁天坐禅会も再開しました。長泉寺の坐禅会は先の住職から五十年以上継続している歴史ある坐禅会です。今年からは月一回、日曜朝六時から坐禅、茶話会の後七時解散。会費、会則なし、入退会自由、椅子の使用も可。さわやかな朝のひととき心の清寂を味わってみませんか。



## 石川ロータリークラブ 職場訪問で長泉寺へ



十一月十四日石川ロータリークラブ会員二十五名が「職場訪問」で長泉寺を訪れ、住職から長泉寺の歴史の説明を受けながら諸堂の仏像や石川公墓地を巡りお参りしました。昼食後は宗教学者としてのお寺のありようや曹洞宗僧侶が得度(とくど・入門の儀式)から住職になるまでの歩みについて聞きました。

今、政治の世界で親子継承が問題視されていますが、お寺も同じです。お寺も世襲があたりまえになり、家業化の中で内向き指向となって時代を牽引するダイナミズムがなくなりそうです。

お寺の継承は本来、師匠が持つ全てのものを厳選したひとりの弟子に余すことなく伝える(相承・そうじょう)ことで正しく受け継がれてゆくとされます。世襲であっても師資(師と弟子)共に緊張感を失わず生老病死の四海に漂う苦しみや悲嘆の中にある多くの方々に仏教の光をあてていかなければと思います。

石川ロータリークラブの皆さん  
長泉寺檀信徒会館にて